

高齢者と子どもの心をつなぐ統合的アプローチ

—高齢者施設における子どものボランティア活動の事前教育のあり方に関する研究—

黒川 由紀子

(大正大学・慶成会老年学研究所)

宮本 典子

(慶成会老年学研究所)

丸山 香

(慶成会老年学研究所)

三橋 喜久

(社会福祉法人至誠学舎立川至誠ホームキートス)

黒沢 幸子

(目白大学人間社会学部心理カウンセリング学科)

<要 旨>

高齢者施設における子どものボランティア活動が、心の通う世代間交流として実現するための事前教育のあり方を検討することを目的として、子どもや教員に対する意識調査、「老い」に関する教材作成、中学校における授業実践、教材の改訂を行った。東京都内の特別養護老人ホームにおいてボランティア活動をはじめる中学生と介護体験実習を受ける大学生(計 95 名)、特別養護老人ホーム職員(6 名)、ボランティア活動担当の中学校教員(1 名)に対し、ボランティア活動に対する意識調査を行った。調査結果をもとに、子どものボランティア活動の準備教育に用いる教材の試作版を作成した。作成した教材を用い、東京都内の2つの中学校(102 名: A中学校第2 学年生徒 80 名、B中学校ボランティア部生徒 22 名)で授業を行い、ボランティア活動準備教育のあり方を検討し、教材の改訂を行った。「老い」に関する教材を用いた準備教育は、ボランティア活動にあたる子どもの不安を解消し、高齢者と積極的に交流してみようという意欲を育み、同時に子どもが、「人が生きるとは」、「老いるとは」といった重要なテーマについて考える契機となることが示唆された。

<キーワード>

高齢者福祉施設、子ども、世代間交流、ボランティア活動、事前教育

【はじめに】

近年、教員免許を取得する学生の施設研修が義務化され、また小中学生の高齢者に対するボランティア活動が奨励され、子どもや学生を高齢者施設にボランティアとして派遣する試みが広がっている。高齢者が、子どもたち、若年世代と意味のある交流をはかることは、「生きがい」、「世代間伝承」として有意義であるばかりでなく、子どもの心の成長にとっても重要であると考えられる。しかしながら、その準備教育が不十分なために、現場では数々の問題が生じていることも事実である。本研究では、高齢者と子どもの心をつなぐ統合的アプローチの一貫として、子どもと高齢者が意味のある交流を深めるための、高齢者施設における子どものボランティア活動の準備教育教材の作成を目的とする【研究Ⅰ】。また、生き生きとした世代

間交流を促進する方法を都内の中学校における実践を通して模索し、その効果や課題を検討する【研究Ⅱ】。

【研究Ⅰ】ボランティア準備教育教材のパイロット版小冊子(「お年寄りと接する前に」: 仮称)の作成

その1. 学生のボランティア活動に対する意識調査・ボランティア準備教育教材としてのパイロット版小冊子の作成

1. 目的

高齢者福祉施設職員、学校担当教員、青少年などにボランティア活動に関するアンケート調査及び面接調査を行い、現在の交流活動における問題点を明らかにする。その結果をもとにボランティア準備教育のためのパイロット版小冊子を作成する。

2. 調査対象

東京都内の特別養護老人ホーム K (以下 K ホームとする。特別養護老人ホームは身体的、精神的な障害のため常時介護を要する高齢者を入居の対象とした施設である)においてボランティア活動をはじめ中学生と介護体験実習を受ける大学生 (95 名)、高齢者福祉施設職員 (6 名)、特別養護老人ホームにおいてボランティア活動をはじめ中学生の担当教員 (以下教員とする) (1 名) を対象とした。

3. 調査方法

ボランティア活動及び介護体験実習の事前オリエンテーションに参加中の学生にアンケート調査を行った。高齢者福祉施設職員及び、教員に対してはアンケート調査と同時に面接調査を行った。

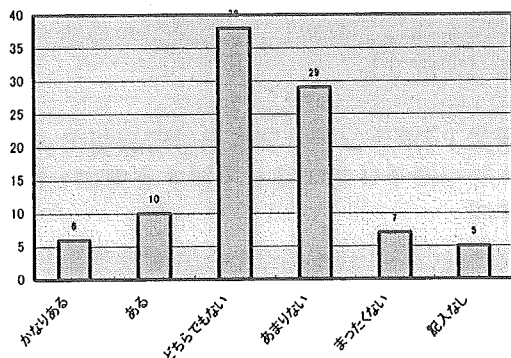
4. 調査内容

ボランティア活動に対する意識調査として、以下の項目について質問した。①ボランティア活動をはじめにあたって、不安はありますか、②どのような点が不安ですか、③不安を軽減するため、どのような支えがあればよいと思いますか、④これまで痴呆症のお年寄りと接したことはありますか。高齢者福祉施設職員及び、教員に対しては面接調査を行い、青少年のボランティア活動の現状に対する意見、問題点について質問した。

4. 結果・考察

<ボランティア活動をはじめにあたって、不安があるか>という問いに対して、95 名中 6 名が「かなりある」、10 名が「ある」と回答した。(表 1)

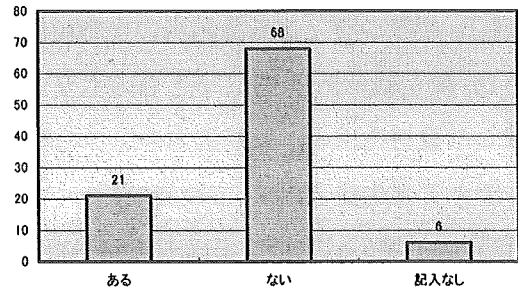
(表 1) ボランティア活動をはじめにあたり、何か不安はありますか？



<どのような点が不安か>という質問に対しては、「お年寄りと上手に話すことができるか」、「言っではいけないことをいってしまったらどうしようか」といったような実際のコミュニケーションの取り方に関する回答が大半

を占めた。その他、「怪我をさせてしまったら心配」、「失敗して迷惑を掛けてしまう事が心配」など対応の仕方についての不安も挙げられた。<不安を軽減するため、どのような支えがあればよいか>という質問に対しては、「ボランティア活動をすでにしている人と共に活動し学んでいく」、「職員から学ぶ」、「ボランティア活動前に説明をよく聞いておく」、といったようにボランティア活動に関して事前に学ぶ機会があることが不安の軽減になると考える意見が多かった。<痴呆症のお年寄りと接したことがあるか> (表 2) という質問に対しては、95 名中 68 名の学生が「ない」と回答した。

(表 2) これまで、痴呆症のあるお年寄りと接したことはありますか



高齢者施設職員及び担当教員に対して行った調査の結果、若い世代のボランティア活動については、全員が賛成と回答した。その理由としては、「お年寄りがよろこぶ」、「施設全体の風景が変わる」、「お年寄りに活気が出てくる」、「お年寄りが先生になり、若い世代の人達に教えてあげるよろこびができる」等、世代間交流が若い世代と高齢者の両者にとって有意義であるとの指摘が多かった。一方で、若い世代のボランティア活動の受け入れに関する問題点も挙げられた。例えば、「事前の準備教育不足」「受け入れ側の体制が整っていない事」「職員が共に活動できる時はいいが日常業務が忙しく時間がとれずに十分に事前研修ができない事」等である。調査の結果挙げられた問題点や不安の軽減のためには、ボランティア準備教育の充実が必須であると考えられた。また、ボランティア準備教育の一助として、小冊子を作成し、使用することが有用である可能性が示唆された。

次に、調査結果をもとにボランティア準備教育のためのパイロット版小冊子を作成した。パイロット版小冊子の内容は以下の通りである。①思い出に残っている高齢者、②自分が年をとったらどんなおじいさん、おばあさんになりたいか、③高齢者福祉施設入所中の高齢者との会話を想定したロールプレイ、④高齢者と接する

際に注意する点、⑤痴呆症とはどういう病気か等である。パンフレットの主たる対象を、小学生高学年～高校生と想定した。知識の提供だけに留まらないよう配慮し、世代のつながりを意識できるよう、自分と高齢者の関わりについて書く項目や実際の会話のロールプレイなどを挿入した。また、自分が80才になった時にどのように過ごしたいかということについてマークシート形式で回答する項目を設けた。先に行った意識調査の結果、コミュニケーションの取り方や対応の仕方がわからず不安という意見が挙げられた。そこで、高齢者と接する際の具体的な場面の例をあげ、コミュニケーションの取り方を示した。(例、これからはじめて声をかける時には？まず、自己紹介をします。「私は第一中学校から来た山田秋子です。よろしくお願ひします」) 痴呆症についても専門用語を多用せず、平易な言葉使いでわかりやすく説明した。

その2. その1. で作成したパイロット版小冊子の改訂

1. 目的

その1. で作成したパイロット版小冊子を試行し、アンケート調査を行う。より使いやすく有用な小冊子にするために改訂する。

2. 調査対象

K ホームにおいてボランティア活動をはじめ中学生と介護体験実習を受ける大学生(95名) 高齢者施設職員(6名)、教員(1名)を対象とした。

2. 調査方法

中学生と大学生にその1. で作成したパイロット版小冊子を試行し、アンケート調査を行った。高齢者施設職員及び、教員に対してはアンケート調査と同時に面接調査を行った。

3. 調査内容

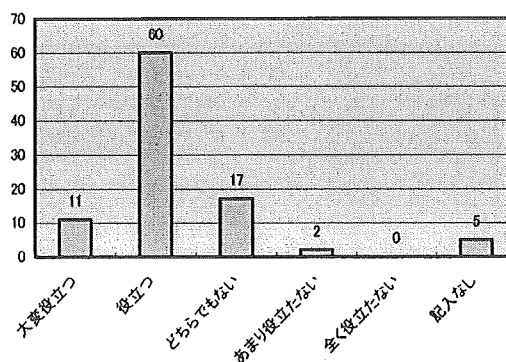
質問内容は次の通りである。①活動にあたり、この冊子は役に立つと感じますか、②冊子にどういった内容が盛り込まれていたら、活動に役立つと思いますか、③この冊子を読んで、痴呆症について少しはイメージすることができましたか。

4. 結果・考察

<活動にあたり、この冊子は役に立つと感じますか>という質問に対して95名中11名が「大変役立つ」60名が「役立つ」と回答した(表3)。

「右も左も分からない自分にとって、良い手引きとなる」、「不安をなくす事は冊子を読むだけではできないが、軽減することができる」、「高齢者と接する際に注意する点がわかって

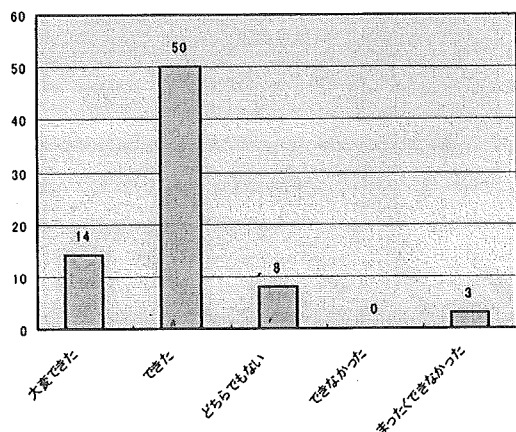
(表3) 活動にあたり、この冊子は役に立つと感じますか



よかった」、「痴呆症の事が詳しく書いてありよかった」という意見がその理由として挙げられた。他に「ボランティアと聞くと大変だと思っていたが、お話することもボランティアになると知った」、「年をとるといろいろ不自由な事があるんだなと思った」といったように、冊子を使用することによって普段は考えることのない、「ボランティアについて」「高齢者について」考える機会を提供できることがわかった。<冊子にどういった内容を盛り込んだらよいか>という質問に対しては、「お年寄りに対してどのような質問をすれば気持ちよく答えてくれるのか」、「耳の良くない人にはどれくらいの声の大きさで話したらよいか」といったように高齢者とのコミュニケーションの取り方についてより具体的な方法を知りたいという声がほとんどであった。「実際のボランティア活動にはどのような活動があるのか例をあげてほしい」、「体験談を載せてほしい」、「質問があった時のために連絡先をいれてほしい」といった意見も挙げられた。パンフレットそのものについては、「写真を入れる」、「カラーにする」、「車椅子の構造について書く」等より見やすく、興味を引くデザインにすることが求められているようであった。<冊子を読み、痴呆症についてイメージすることができましたか>という質問に対して、95名中14名が「大変できた」50名が「できた」と回答した(表4)。

痴呆症のある高齢者とほとんどの学生が接した経験がなく、ボランティア活動前に痴呆症に関する知識を得ておくことは重要な事と考えられた。高齢者福祉施設職員の意見として、「若い世代とひとくくりにするのではなく、小学生、中学生、高校生それぞれに分けて、それぞれに合う文章表現をした方がより効果的だと思う」、「高齢者についても、多様な生活を送っているということがイメージできるように

(表4)この冊子を読み、痴呆症について少しはイメージすることができましたか。



配慮すべきである」という意見が挙げられた。以上の調査結果をもとに検討を重ね、以下の点について冊子の改訂を行った。

- ① B5版からA4版にし、文字を大きくした。
- ② 高齢者とのコミュニケーションの取り方については、より具体的で明確な表現に変更した。
- ③ 実際のボランティア活動者にインタビューを行い、体験談を掲載した。また、ボランティア活動の内容を具体的に紹介した。
- ④ 高齢者との会話のロールプレイの項目を削除し、代わりに自分がボランティアを受ける立場になったらどのようなボランティアがよいか、マークシート形式で答える項目を設けた。

【研究Ⅱ】 高齢者と子どもの心をつなぐ統合的アプローチの試み・パイロット版小冊子を使用した実践

1. 目的

筆者らは、痴呆性高齢者や障害を有する高齢者に対する心理的援助を行う中で、病気や障害のために他者からの援助が不可欠であっても、「自分が生きてきた証を残したい」「次の世代に何かを伝えたい」との声を数多く聞いてきた。

また、特別養護老人ホームなど的高齢者福祉施設に勤務する職員からは、小中学生のボランティア活動や大学生等の施設研修について、「入居する高齢者にとっても大変良い刺激となり、楽しみに待っている高齢者もあるが、準備教育のないままの活動は職員の負担が増加し、困惑してしまう」との声を聞いてきた。

そこでパイロット版として作成した小冊子（「お年寄りと接する前に」）を用い、具体的な

世代間交流のあり方を検討することを本研究の目的とする。高齢者が実際に青少年にどのようなことがらを伝えたいと考えているかを伺い、それを伝えること、また、中学生がそれをどう受け止めるかを探っていくこととする。その結果をふまえ、いきいきとした世代間交流のための事前研修のありかたを模索することも、本研究の目的である。

2. 対象

東京都内の公立中学校2校を対象とした。うち1校（A中学校）は、第2学年の生徒全員（80名）を対象とし、もう1校（B中学校）は、課外活動としてボランティア部に所属する第1学年から3学年までの生徒（1年生8名、2年生10名、3年生4名、計22名）を対象とした。中学校は、共に共同研究者の黒沢より紹介を受けた。いずれも教諭が道德教育、中でも高齢者と中学生の交流や、その指導に関心を持つ学校であった。

また、高齢者から子どもたちへのメッセージを届けるため、70台から90台の男女計6名に、インタビューを行い、「メッセージ」の録音を依頼した。表1に依頼に応じた高齢者のプロフィールを示した。

表1 高齢者のプロフィール

		*	居住場所	特記事項
1	男	86	老人病院	下肢の麻痺のため、車椅子生活
2	男	94	自宅	3と夫婦
3	女	88	自宅	現役ピアノ教師
4	男	93	老人病院	妻と共に入院するが昨年死別
5	男	90	老人病院	脳血管性痴呆症
6	女	87	老人病院	心臓病、10年前より入院生活

*印は年齢。

3. 方法

高齢者と子どもの心をつなぐ豊かなコミュニケーション実現のための、ボランティア活動準備教育の小冊子（「お年よりと接する前に」）を用い、A・Bの2つの中学校において授業を行った。小冊子は担当教諭に依頼し、授業前に生徒に目を通してもらった。その他体験的に高齢者を理解できるよう、授業内容の検討を行った。その一つとして、本研究の趣旨を伝え理解の得られた高齢者に対し、個別にインタビューを行い、子どもたちに伝えたいことについて録音し、授業の際に教材として使用した。

A中学校では、道德授業の一コマを、B中学校では課外活動の時間を利用した。両校とも、授業終了後に高齢者イメージを尋ねるアンケート調査を行った。アンケートは、訪問先の中学校の教諭と相談し、内容を検討した。複雑な家庭事情を背景に持つ生徒を考慮し、具体的な高齢者体験について尋ねることは避けた。アン

ケートでは、授業の感想ならびに身近な高齢者と接する機会や頻度について尋ねると同時に、①高齢者に対するイメージ、②年をとったらやってみみたいこと、③今しかできないこと、年をとったらできないこと、④高齢からのメッセージを聞き感じたこと、高齢者へのメッセージを、具体的に記述する項目を設けた。

(1) A 中学校 (第 2 学年の全生徒を対象とした試み)

A 中学校は、東京都東部に位置する公立中学校である。第 2 学年は、3 クラス合計 80 名の生徒を有する。この試みは、道徳地区公開授業として行われた。これは、生徒の保護者や地域住民も授業を参観できるものであった。共同研究者のうち 1 名が本研究の趣旨を担当教諭に伝えたと、賛同が得られ、この試みが実施されることとなった。

共同研究者のうち 3 名が事前に担任教諭らと打ち合わせを行い、50 分の授業の内容や時間配分について検討した。授業は、各クラスの担任の教諭とともにチームティーチングの形式をとった。授業内容は、①担任教諭によるオリエンテーション、授業の趣旨説明、筆者らの自己紹介、②体験ワーク 1「何歳まで生きていますか?」、③体験ワーク 2「高齢者からのメッセージ」(テープに録音した高齢者に対するインタビューを聞く)、④体験ワーク 3「食事介助をする、される体験をする」(嚥下困難な高齢者向けのとろみをつけたジュースを飲む、飲ませる体験をする)を核とした。体験ワークは、高齢者と接する機会の少ない中学生が、可能な限り高齢者について理解を深め、その心に少しでも寄りそうことができるよう、特別養護老人ホームに勤務する共同研究者と相談し内容を検討した。また、多様な高齢者イメージを抱けるよう、援助が必要な高齢者ばかりでなく、80 台あるいは 90 台になっても現役で活躍する高齢者の紹介を合わせて行った。

(2) B 中学校 (ボランティア部に所属する中学生を対象とした試み)

B 中学校は、東京都西部に位置する公立中学校である。ボランティア部は課外活動であり、週 1 回約 90 分の校内での部活動のほか、週末や放課後を利用して、主に生徒たちが自主的に運営をし、特別養護老人ホームや児童福祉施設等での活動を行っている。A 中学校と同様、共同研究者の 1 名が本研究の趣旨を部顧問教諭に伝えたと、賛同が得られ、この試みが実施されることとなった。

共同研究者のうち、心理職 2 名と特別養護老人ホーム (K ホーム) に勤務する 1 名が、週 1

回の部活動の時間を利用して授業を行った。核となる内容は A 中学校と同様とした。ボランティア活動に関心のある中学生を対象としていることから、K ホームにてボランティアコーディネーターとして勤務する共同研究者が、自らの経験を語り、質問を受け、自由に討議できる時間を持った。

4. 結果および考察

A 中学校での授業は、保護者や地域住民、担任以外の教諭も参加した。B 中学校での授業に当日参加した部員は、1 年生 8 名、2 年生 10 名、3 年生 4 名であった。部員全員が高齢者施設でのボランティア活動に参加しているわけではなかったが、全員が「機会があれば参加したい」と述べた。将来、職業として高齢者と接したいと考えている者も、1 名あった。

インタビューを行った全ての高齢者から、中学生などの次世代へたくさん伝えたいことがらを持つことが伺えた。世代間交流は、高齢者が培ってきた経験を単に伝える役割ばかりでなく「年を重ねることで、初めて見えてくることもある。年を取ることは案外良いことでもあるとつくづく感じている」との高齢者のメッセージから、中学生が成長を重ねていくことに対する不安を緩和させる意味も有することが示唆された。メッセージを聞いた中学生からは、「お年寄り弱い人ばかりだと思っていたが、すごくというほどではないが毎日が楽しそうで、年を取るというのはさみしいだけじゃないんだな、と思った」「100 歳まで生きてみたいと思った」「すごく励みになること言ってるな」と思った。力がわいてくる」といった感想が寄せられた。

授業では、高齢になると自分の思いとは裏腹に他者からの援助なしには生きられない場合もあることを伝え、またその一端を体験する機会を設けたが、それでもなお高齢者の生の声を聞き現実を知ること、「70 歳くらいまでしか生きたくないと思ったけど、今日いろいろ体験して、もっと生きてみたいなって思いました」といった感想を寄せるものもあった。これらは実際に高齢者と接することが、いきいきとした交流を深めるばかりでなく、自らが成長していくためにも大切な意味を持つことを示すだろう。中学生に高齢者へのメッセージを求めたが、「長生きをしてください」「今まで苦勞したぶん、のんびり過ごして欲しいです」「人生、まだまだこれからですよ!」等の言葉と同時に、自らを振り返り「自分の親も大切にして、長生きしてもらいたいと思った」「一生懸命生きたいと思います」といった言葉が寄せられた。

これらの言葉を聞き、担任教諭からは「普段接する生徒の新たな一面をうかがい知ることができた」との感想が聞かれた。

A、B両校の生徒とも、高齢者と接する機会は限定されているものの、高齢者に対して抱くイメージは肯定的なものだった。統計的な処理は行わなかったが、「元気がある」「明るい」「面白い」「やさしい」と捉える者は、「元気がない」「暗い」「つまらない」「こわい」と捉える者よりも多かった。

子どもたちが、ボランティア活動などで高齢者と接する前には、意図的に「高齢者を敬おう」「敬うべきだ」と情報を操作して提供するのではなく、実際の高齢者の状況について、事実を正面から提示し、体験的に学習をし、自ら考え感じる事が不可欠であることがうかがえた。

【課題】

①対象の数や場を増やし試行すること

今回の試みは事前教育を行う対象者の数や場が限定されている。より具体的で効果的な事前教育のあり方を探るため、より広い対象に施行することが求められよう。

②多領域の連携による幅広い指導者の育成

心の通い合う世代間交流を実現するためには、単に教材を読むだけではなく、高齢者の心について専門的な知識を有する、適切な指導者が不可欠である。また、子ども達が無理なく理解できる内容を把握し、自らの気持ちを率直に表せるような指導者も必要である。その他、ボランティア活動を始める準備教育の中で、子ども達が活動に対し否定的な感情を持つ場合もある。これは、新しい課題を発見したり、視野が広がるきっかけともなるだろう。こうしたことを柔軟に受け止められる指導者が不可欠となる。このように、教育と福祉あるいは医療といった多様な領域間で連携をはかることが極めて重要であり、その方法を検討することも今後の重要な課題である。

【終わりに】

少子高齢社会を迎え、子どもや高齢者のさまざまな「問題」が、大きくクローズアップされるようになった。子どもや高齢者は「問題を持つ存在」である以上に、潜在的な可能性に満ちみちた存在である。

子どもがボランティア活動を通じて高齢者と触れる機会が増える中、その交流の時間を真に意味ある出会いの場とするためには、ボランティア準備教育が不可欠である。

子どもは、ライフヒストリーすべてのステージを生きぬいた存在としての高齢者から、生きてきた知恵を学び、高齢者の存在そのものに触れる

ことで自らを考える奥行きのある味わい深いメッセージを受け取る可能性がある。また、心から交流したいと願う子どもに出会うことで、高齢者は人生の先輩として、あるいは伝承者としての役割を生き、今、ここで豊かな時間が紡がれる。

今回の研究をささやかな第一歩として、さらに研究や実践を深めていきたいと考える。

【参考文献】

- 黒川由紀子、丸山香ほか（1998） 老いの臨床心理 日本評論社
 黒川由紀子（1995） 痴呆老人に対する心理的アプローチ. 心理臨床学雑誌, 13-2; 169-179
 斎藤正彦（2000） 痴呆介護の100箇条 ワールドプランニング
 内閣府編 平成13年度版 高齢社会白書
 三菱総合研究所編 図説福祉・介護ハンドブック（2001） 東洋経済新報社